
災いの姫君 短編集

TEAR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災いの姫君 短編集

【Nコード】

N4344V

【作者名】

TEAR

【あらすじ】

災いの姫君の短編集です。

読まなくてもストーリーはつながりますが、読んだほうが詳しい内容が分かると思います。

不定期更新で、忘れた頃に更新されると思います^^

1 変わった襲撃者（前書き）

今回は、リーナスと出会ったちょっと前のイージュ&メディアのお話です。

楽しんでいただければ幸いです！

1 変わった襲撃者

本は良い。本は退屈な生活を紛らわせてくれるから。本を読むという感覚は、本の中に沈んでいくような感じに近い。本の中に沈んでいれば、嫌な事も、自分に重くのしかかる定めも、自分が犯した罪も、何もかもを考えなくても良い。

……だから、私は本が好きだ。

「イージュ様。お茶が入りました」

痛いほどの静寂を破って、声とともにミディアがやってきた。ほわわと湯気が立つカップを手に、左手にはお菓子も持っている。ミディアが立ち止まってしまうと、また元の静寂がやってきた。いつもと同じ、代わり映えのしない日常。

「……ありがと。そこら辺に置いて」

読みかけの本を中断したくなかったのでそう言った。今、良い所なのだ。

「床に置くわけにはいきません。一国の姫君ともあろう者が、そんな……」

ミディアが不満そうに言う。残念。こうなることは予想済みだ。

「ミディアだって分かってるはずよ。もう私は姫じゃない。戸籍上は姫だとしても、考え方は姫じゃない」

「それは……」

「私の中に、姫であろうとする考えがあるのは事実よ。ごく一部だけだね。でもあの計画を考えついた時から、私は姫ではなくなったの。……あなたもそろそろ認めなさい？」

「……いえ。私は諦めません」

ミディアが低い声で告げた。

（こういう頑固な所は誰に似たのかしら？）

そう考え、すぐ納得した。

（……私に似たんだわ）

「お堅いわねえ。……いいわ。とりあえずそこら辺に置いて」

ミディアがしぶしぶといったふうのコップを置いた。さわやかなお茶の香りがする。その香りにつられて、ついつい読みかけだった本を閉じて、コップを取ってしまった。

（ま、後でも読めるし）

「へえ。新しいお茶じゃない。どこから取ってきたの？」

声を上げると、ミディアが苦笑した。

「取ってきたとか、不穏なこと言わないでください。……王たちの使っている物を食料庫から持ってきました」

「うわっ！ 誰にも見つからなかったでしょうね！？」

少し慌てた私を見て、ミディアは少し微笑む。

「大丈夫です。『変身』を使って侍女に化けましたから」

自信満々のミディア。

「ホントに……？」

「大丈夫ですから」

「ま、あんたが失敗するっていったら、相当よねえ。でも、あのときのことを忘れたとは言わせないわ」

にやりと笑って言う、ミディアが思いつきり顔をしかめた。

「そろそろ忘れてください……」

口をへの字に曲げて言う。

（……こういう所は、可愛げがあつていいのよね）

ふだんはいちいちうるさいミディアだが、愛想が付きないのは、こういう所が要因だったりする。

「わ、分かってます」

ミディアは唇を尖らせて言った。あるとき、あときのミディア

はとてもかわいかった――。

私は激しい物音に目を覚ました。

（私の快眠を妨げるなんて、どういうことかしら！？）

そう思ってまた閉じようとするまぶたを必死でこじ開ける。

ぼんやりした頭のまま音のする方に目を向けると、ミディアがドアを必死の形相で抑えていた。いつもとは違うその真剣な顔に、冷水を浴びたように一瞬で眠気が覚める。

「あんた、何やってるの！？」

思わず問いかけると、ミディアはぱつと顔を輝かせ、そしてすぐに泣きそうな顔になった。

「い、イージュ様。助けてください！」

その間にも、ドアの向こう側からは、ドンドンと扉を叩く鈍い音が、とぎれることなく聞こえてくる。

それとともに獣のうなり声も。その二つの音は大きくなっていく。

「私は何もしてませんよ！　ただ、食料庫に入ったら追いかけてきたんです……！」

とりあえずベットから飛び起きて一緒になって扉を押さえた、力は意外にも強くて、ついつい開けられそうになる。隣のミディアはというと、疲れ切った額には大粒の汗が浮き出していた。どれほどの時間、ここでこうやっていたのだろう。もうちょっと早く起きてあげられれば良かった。

「いたっ！」

そのとき強く扉が叩かれて、思わず声を荒げてしまった。

「バカ、何で眠らせないのよっ？」

「魔術が聞かないんです！！」

ミディアが間髪入れずに答えた。

「はあ！？ そんなこと、あるわけないじゃないの！ いいわ、私が倒すわ」

ドアを離れる。

「ミディア、そこどきなさいっ！」

ミディアは険しい顔で私を見た。

「イージュ様には危険過ぎます！ ここは私がやりますのでお逃げください！」

「バカ！ そんなへつぴり腰でそんなこと言われても説得力ないわ！ これは命令よ。どけて言ったらどきなさい！」

声に覇気を込めて叫ぶと、ミディアがはじかれたようにドアから離れた。魔術でもう少し抑えておこう。そう思っただけで扉に防護の術をかけておく。

どん、どん。

その間にも、だんだんと音は大きくなっている。

「あんだ。何人連れてきたのよ……」

「え！？ 最初は一人だったんです！ でも、魔術を当てたら増えて。転移を使ったらもっと増えて」

ミディアが必死に弁明する。今にも泣き出しそうなくらい瞳も潤んでいるし……。

（そんなに、自分が失敗したのを許せないのかしら？）

そう考えて一人で納得した。

（そうね、私も、自分の失敗を許せないもの）

何だかんだ言っただけ、やはり私とミディアは人格が同じらしい。人間、窮地に陥ったときに本性が出ると言われているけれど、本当のことだったみたいだ。

「あー。もういいわ。こいつらは剣でしか殺せないってことね？」
こくこくとミディアが何度も頷く。私は魔術を使って親衛隊の宿

舎から剣を二つ引き寄せた。つもりだったが。ミディアには普通の剣が、なぜか私には鎌が来てしまった。

握ってみてから一言。

「……鎌、使えないのよねえ。どうする？」

「ど、どうするって！？ もう目の前に迫ってますがー！」

見るからに焦ったミディア。それもそうだろう、頼みの綱の主がこんなことでは、幾ら命がたくさんあっても足りない。

「とりあえず、やるしかないわね」

そう言った途端、ひときわ大きい爆発音とともに、扉が木っ端みに破壊された。かなりの量のホコリが舞い上がり、敵がどこにいるのか良く分からない状態だ。

「あっちゃー。もうちょっと強くしておけば良かったわ……」

つぶやいた瞬間、誰かの殺気が迫ってくる。

「あつぶないわね！」

すんでの所でステップでかわしたが、あの速さはただの魔物ではない。

だんだんとホコリが晴れてきて、敵の様子が見えるようになる。

その姿を見て、二人は凍り付いた。

そこにいたのは、紛れもなく、ミディアだったのだ。

「え！？ は！？ ということですか 私はどこですよ！？ 何ですか！ あいつは」

今にも取り乱しそうなミディアの肩を、つかんで止めさせる。耳元で小さくささやいた。

「ドッペルゲンガーよ。……これは厄介ね。でも一人になってる。

こつちには好都合よ」

「え！？」

ミディアが聞き返す前に、ドッペルゲンガーが剣を突き出してきた。

直前でひらりとよける。こちらの術を盗まないということは、こいつ、ただの化け物ではないのかも。

とりあえず、自身を強化する魔術を念入りにかけておく。これで、一回刺されても死なないとは思っけど。あいつがどれくらい力を持っているかは分からないから、用心しておいた方が良さ。

ミディアはというと、私が目を離れた何秒かの間に、隅っこに追いやられていた。少しぐらい反撃でもすれば良さそうなのに、自分と同じ相手の姿に遠慮してしまっているのか、全く手が出せずにいる。

「ほんととバカ」

小さく吐き捨てると、あいつが振り向いた。ミディアの元々の赤い瞳が、どすぐろい紅に変化している。瞳の焦点は合っており、どこを向いているのか定かではない。

「……ほんと、何なのかしら」

一応、鎌を握って構える。鎌で戦うのは初体験だが、どうなることやら。何と、相手もミディアのようにへっぴり腰の剣の構え方だ。これなら、いけるかもしれない。

そのままダブルゲンガーと私との間でにらみあいが続く。一応は私も緊張しているのだ。相手の強さが分からない以上、警戒した方が良く、私の全身の細胞が叫んでいる。死にはしないと思っっているが、痛いのは嫌いなのだ。

——その時。

「きゃあ！」

かなり場違いな黄色い叫び声とともに、ミディアが後ろからあいつを、斬った。後ろから来るとは思っていなかったのか、はたまた私に気をとられていたのか。あいつは、まともにそれを食らってよろめいた。

「やったあ……。やりましたよ！」

ミディアが輝くような眩しい笑顔をこちらに向けた。

「バカっ！ まだ死んでないわ」

思わず叱責すると、あいつがまた起き上がった。ミディアに斬ら

れた所が、もう復元されている。

「……こいつ、何のために私達を？」

あいつは、真紅の瞳を私に向け、そして、にたりと笑った。私もミディアも、その笑顔に、思わず声を失ってしまった。その笑みは、狂気に満ちあふれていながらも、見る人を虜にする、妖しい魅力を称えていた。

「今回はほんの小手調べ。また来る」

あいつは、女の声で微笑みながら言った。そして辺りに夜の闇より濃い漆黒の光が溢れた。それが『転移』の術だと気付いた時には、あいつは、もうどこにもいなかった。

「あ……。あいつは……」

私がやっとの事で声を出すと、ミディアが近づいてきて、そっと肩に触れた。私が動揺しているのを感じ取っているのか、その手も震えている。

「……あいつは。あいつは……」

声にしようとしても声にならない。さっきまで気が動転していたミディアが、こんなときに限って落ち着いているというのが氣にくない。

「イージュ様。大丈夫です、大丈夫ですから」

ミディアが、そっと私を抱きしめた。

（暖かい……）

その温もりに包まれたまま、私の意識は深い闇の中に沈んでいった。

1 変わった襲撃者（後書き）

最後に謎が増えました。これは本編の中で解いていく予定です^^

それでは、読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344v/>

災いの姫君 短編集

2011年8月13日03時32分発行